

# 平安文学におけるかな書道

——『枕草子』にみられる書道観と時代性——

南 條 佳 代

## 〔抄 録〕

『枕草子』において、書に関する多くの記述がなされている。

これは、書に造詣が深い清少納言ならではの書道観として、この時代の書風や様子を著しているのである。

では、随筆である『枕草子』での書の扱われ方は、実際にこの物語が書かれた平安時代の書と、どういった関わりがあるのだろうか。本文において、紙（料紙）や消息文、添え物、書風の分析を加えながら検証していきたい。

さらに、本稿では、『紫式部日記』より紫式部における清少納言の人物評について見ていき、それを踏まえた清少納言の書の捉え方、またこの時代の書の扱われ方について考察し、明確にしていくものである。

キーワード 枕草子 清少納言 消息文 書

## 一 はじめに

『枕草子』をはじめとする平安文学には、書についての多くの記述がある。ここでは、特に書に造詣が深かった清少納言の書道観として、この時代の書風や様子として捉えることが出来るのである。

それでは、随筆である『枕草子』の書の扱われ方は、実際にこの作品が書かれた平安時代の書と、どのような関わりがあるのだろうか。

本稿は、『枕草子』の中で語られている「書」とは、清少納言にとってどのようなものなのかを本文を踏まえながら明らかにしていくものである。さらに、『紫式部日記』より紫式部における清少納言の人物評価を見ていき、清少納言の書の捉え方や平安時代における書の扱われ方を『枕草子』を中心に、その時代背景、文化としての書道の位置付けを明確にしていくものである。

## 二 枕草子に見られる紙(料紙)

『枕草子』には、書道に関する多くの記述がある。まずは、紙(料紙)についての記述を見ていきたい。

1 「御硯の墨すれ」と仰せらるるに、目はそらにて、ただおはしますをのみ見たてまつれば、ほどどつぎめもはなちつべし。白き色紙押したたみて、「これにただいまおぼえむ古きこと一つづつ書け」と仰せらるる。(二一段) (『新編日本古典文学全集』<sup>1</sup>に拠る。以下同じ。)

2 「円融院の御時に、『草子に歌一つ書け』と殿上人に仰せられければ、いみじう書きにくう、すまひ申す人々ありけるに、」(二一段)

3 古今集の草子を(二一段)

4 白く清げなるみちのくに紙に、いといと細う書くべくはあらぬ筆して、文書きたる。(二九段)

5 朴に紫の紙はりたる扇ひろごりながらある。みちのくに紙の畳紙のほそやかなるが、花か紅か、すこしにほひたるも、几帳のもとに散りぼひたり。(三四段)

6 萩の露ながらおし折りたるにつけてあれど、えさし出ず。香の紙のいみじうしめたる匂ひ、いとをかし。(三四段)

7 紫紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉ほそくまきて結び、また白き紙を根してひき結ひたるもをかし。いと長き根を、文の中に入れなどしたるを見る心地ども、艶なり。(三七段)

8 青き薄様に、いと清げに書きたまへり。(七八段)

9 硯にある紙の端に、(八〇段)

10 薄様の草子。柳の萌え出でたるに、青き薄様に文つけたる。(八五段)

11 紫の紙を包み文にして、房長き藤につけたる。(八五段)

12 懷紙に、(一〇二段)

13 いみじう赤き薄様に、(中略)めでたき紅梅につけて奉りたる、(二七段)

14 藏人所の紙屋紙ひき重ねて、(中略)いみじう事おほく書きたまへる、いとめでたし。(二三〇段)

15 胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと思ひて、あけもて行けば、法師のいみじげなる手にて、(一二二段)

16 疊紙に書いておこせたるを(一五五段)

17 浅緑なる薄様に、艶なる文を(一七七段)

18 こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、(二八三段)

19 青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、(二二三段)

20 この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。(二二三段)

21 唐の紙の赤みたるに、そうにて、(二二五段)

22 みちのくに紙、ただのも、よき得たる。(二五八段)

23 めでたき紙、二十を包みて給はせたり。(中略) この草子に作りなどもてさわぐに、(二五九段)

24 御返し、紅梅の薄様に書かせたまふが、御衣の同じ色にほひかよいたる、なほかくしもおしはかりまゐらする人はあらむとぞくちをしき。(二六〇段)

25 紙のまたいみじう赤きに、(二七四段)

26 いと白きみちのくに紙、白き色紙の、結びたる上に引きわたしける墨のふと氷りにければ、裾薄になりたるを、あけたれば、いとほそく巻きて結びたる、巻き目はこまごまとくぼみたるに、墨のいと黒う、薄く、くだりせばに、裏表書き乱りたるを、(二七五段)

27 浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。(二八二段)

28 薄様、色紙は白き。紫。赤き。刈安染。青きもよし。(一二二段)

これらのように、紙(料紙)について実に多くの記述がある。これは、この時代、紙が非常に貴重で、高価であったからであろう。それは、14「蔵人所の紙屋紙」でもわかるように、京都の紙屋川にあった紙屋院という宮中の反古紙を漉きかえるリサイクル業者までもあったのである。そのリサイクル紙は、薄黒く、官用として公文書に使われたのである。このように、反古紙を無駄にしないのは、この時代の書である「虚空菩薩念誦次第紙背面消息」(こくうぼさつねんじゆしだい<sup>図2</sup>)<sup>図1</sup>いしはいかなしうそく」や、「三宝感應要録紙背面消息」(さんぼ

うかんのうよろくしはいかなしうそく」、「北山抄紙背仮名消息<sup>図3</sup>」(ほくざんしうしはいかなしうそく)、「延喜式紙背仮名消息<sup>図4</sup>」(えんぎしきしはいかなしうそく)などでも見られるように、書き損じた紙の裏を使って消息文が書かれていたのである。特に、消息などは私的なもので、お役所専用のリサイクル紙などは、一般には使うことができなかったのである。

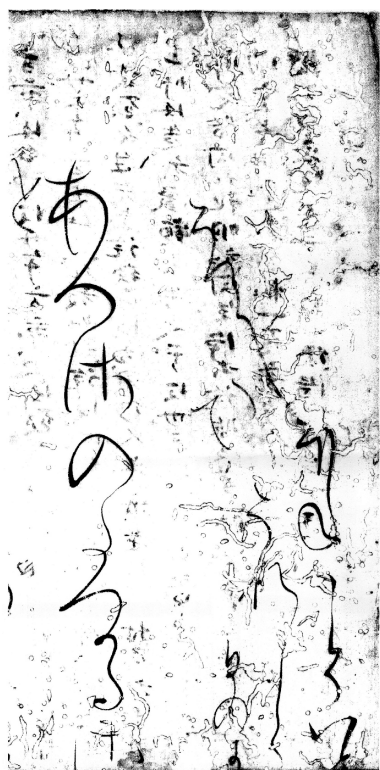
その「三宝感応要録紙背仮名消息」であるが、小松茂美氏が述べるに、

もと大和の永久寺(いまは廃寺)天理市石神宮近隣)に伝来したもの。幕末の勤王画家冷泉為恭が懇望して入手した二巻の巻物。一卷は、直後、木村行納の手に移り、その中の一通に「行成」の名があつたという。が、いまは、その行方を知らない。もしも、それが信すべき情報とすれば、この一連は、藤原行成へ九七二〜一〇二七時代の仮名消息と断定することができる。<sup>(2)</sup>

としている。紙背の書とはこのように、よく見ると上部や中部に裏の文字が映っているのである。何かの反古紙を使ったのであろうが、さらに目を凝らして見ると、書かれているのは真名(漢字)の楷書のようである。表の文字が映るぐらいいないので、紙は薄いいわゆる「薄様」だったのだろうか。また表の真名に対し、裏は消息なので、書かれている文字は仮名である。非常に伸びやかな線で、漢字がほとんど使われていない仮名消息である。拙著で取り上げた「虚空菩薩念誦次第紙背仮名消息」よりも仮名として、連綿も多く書きなれた書風である。しかしながら、「北山抄紙背仮名消息」ほどすっきりとした清新さは

見受けられない。

図1 三宝感応要録紙背仮名消息<sup>(3)</sup>



またさらに、紙としてよきものは28「薄様」とあるが、これは特に消息を書くには、「薄様」が17 19「艶なる」様子を呈するのでよいということである。8 10 19「青き」13「いみじう赤き」17「浅緑なる」18「こちたう赤き」24「紅梅の」というように、さまざまな色があり、後朝の消息などには、添え物の枝と合わせて大いに風情が感じられたのであろう。反対に、15「胡桃色といふ色紙の厚肥えたる」には、「法師のいみじげなる手にて」書かれているのである。色のついた「薄様」の柔らかな優美さに対し、白くて厚ぼったい紙には、法師のくせのある文字だとしている。

これらのように、実に二十八例もの紙についての記述がある。その中でも、白や白っぽい厚手の紙については九例で、色のついた薄様の

紙については十八例もあり、特に、青・赤・紫・浅緑などの色が多く挙げられている。これは、「頭弁」である藤原行成が清少納言と「今日」は、残りおほかる心地なむする。夜をとほして、昔物語も聞え明かさむとせしを、鶏の声にもよほされてなむ」のように、夜通し話すような仲であつたことから、能筆家行成に影響を受けたであろう清少納言の紙に対するこだわりになったとうかがえるのではないだろうか。

### 三 枕草子にみられる消息文・添え物

さらに、その消息文の様子として、次のような記述がある。

①萩の露ながらおし折りたるにつけてあれど、えさし出ず。香の紙のいみじうしめたる匂ひ、いとをかし。(三四段)

②紫紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉ほそくまきて結び、また白き紙を根してひき結ひたるもをかし。いと長き根を、文の中に入れなどしたるを見る心地ども、艶なり。(三七段)

③薄様の草子。柳の萌え出でたるに、青き薄様に文つけたる。(八五段)

④紫の紙を包み文にして、房長き藤につけたる。(八五段)

⑤いみじう赤き薄様に、(中略)めでたき紅梅につけて奉りたる、

(一二七段)

⑥添へたる立文には、解文のやうにて、(中略)いみじうをかしげに書いたまへり。「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせたまひつ。(一二七段)

⑦白き木に立て文をつけて、(一二二段)

⑧紙にはものを書かせたまはず、山吹の花びらただ一重を包ませたまへり。それに、「言はで思ふぞ」と書かせたまへる、いみじう、(一三七段)

⑨遠き所より思ふ人の文を得て、かたく封じたる続飯などあくるほど、いと心もとなし。(一五四段)

⑩こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、(一八三段)

⑪紙などのなめげならぬも取り忘れたる旅にて、紫なる蓮の花びらに書いてまゐらす。(二二五段)

これらのように、⑧「山吹の花びら」や⑪「紫なる蓮の花びら」に書かれた歌について、今井卓爾氏は「それぞれの歌と歌の事情とにふ

さわしいものに書かれており、普通の料紙以上の総合的効果をあげようとしている。」<sup>④</sup>としている。また、藤本宗利氏も、

さればこそこの作品が「紫紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉ほそくまきて結び、また白き紙を根してひき結ひたるもをかし」と言い、「柳の萌え出でたるに、青き薄様に文つけたる」や「紫の紙を包み文にして、房長き藤につけたる」を「なまめかしきもの」の段で言挙げしているのも首肯されよう。つまり歌(あるいは消息文)は、その贈り方も内容の価値とは別箇の価値を有するものなのであり、翻ってそのことは、この作品が消息文について書くのにその料紙にまで言及する場合は、決して等閑視すべき問題でないことを示している。<sup>⑤</sup>

と述べ、和歌や消息文においては、その内容だけでなく、紙(料紙)や装丁となる花や木の添え物までも含めた全てが大切であるとしている。

これは、現代においても手紙を送る際に季節を考えて、例えば、春なら桜色の便箋に封筒を合わせたり、桜の花をあしらったりするのと同等ではないだろうか。相手が大切な人で、なおかつ趣味人やまた、こちらの印象を良くしたい時ほど贈る際の言葉や文面にこだわって、内容だけでなく、見た目の装丁にも気を遣うのである。それが、『枕草子』における①②「いとをかし」や②「心地ども、艶なり」①⑤⑥⑧「いみじう」という思いになるのである。

さらに、花や枝の添え物ではないが、

御返し、紅梅の薄様に書かせたまふが、御衣の同じ色ににほひか

よいたる、なほかくしもおしはかりまゐらす人はあらむとぞくちをしき。(二六〇段)

の段のように、「御衣の同じ色」に紙の色も合わせているのである。でもそれに、気付いてくれる人がいないのは残念だ。としているのである。また、

青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、(二三三段)

の段では、「青ざし」という青いお菓子の敷き紙に、色を合わせた「青き薄様」を用いたのである。これらは、消息の添え物ではなく、むしろ消息が添え物となっているのである。現代でも服の色に、バッグや靴を合わせたり、またお料理の色に合わせて、器を選んだりすることと同じである。ここに、清少納言の高い美意識、美的センスが感じられるのである。

#### 四 枕草子にみられる書風

次に、書風、書きぶりについての記述を見ていく。

A例、いとよく書く人も、あじきなうみなつつまれて、書きけがしな  
どしたるあり。(二一段)

B人のもとにわざと清げに書いてやりつる文の返事、今はもて来ぬら  
むかし、あやしうおそきと、待つほどに、ありつる文、立て文をも  
結びたるをも、いときたなげに取りなし、ふくだめて、上に引きた



りつる墨など消えて、(二三段)

C 物語、集など書き写すに本に墨つけぬ。よき草子などは、いみじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめれ。(七二段)

D 青き薄様に、いと清げに書きたまへり。(七八段)

E ただたどしき真名書きたらむいと見苦し。(七八段)

F 「いみじう真名も仮名もあしう書くを、人笑ひなどする、かくしてなむある」(九九段)

G 書きたる真名のやう、文字の、世に知らずあやしきを見つけて、(九九段)

H 添へたる立文には、解文のやうにて、(中略) いみじうをかしげに書いたまへり。「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせたまひつ。(二二七段)

I 胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと思ひて、あけて行けば、法師のいみじげなる手にて、(一二三段)

J 心にくき所へつかはす仰せ書などを、誰もいと鳥のあとにしも、な

どかはあらむ。(二五二段)

K はじめてまるらむと申さする人のむすめなどには、心ことに紙よりはじめて、つくろはせたまへるを、(二五二段)

L 人の草仮名書きたる草子など取り出て御覧ず。(二七七段)

M 硯取り寄せて、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに、筆にまかせてなどはあらず、心とどめて書くまひろげ姿もをかしう見ゆ。(一八二段)

N この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。(二二三段)

O 唐の紙の赤みたるに、そうにて、(二二五段)

P いと白きみちのくに紙、白き色紙の、結びたる上に引きわたしける墨のふと氷りにければ、裾薄になりたるを、あけたれば、いとほそく巻きて結びたる、巻き目はこまごまとくぼみたるに、墨のいと黒う、薄く、くだりせばに、裏表書き乱りたるを、(二七五段)

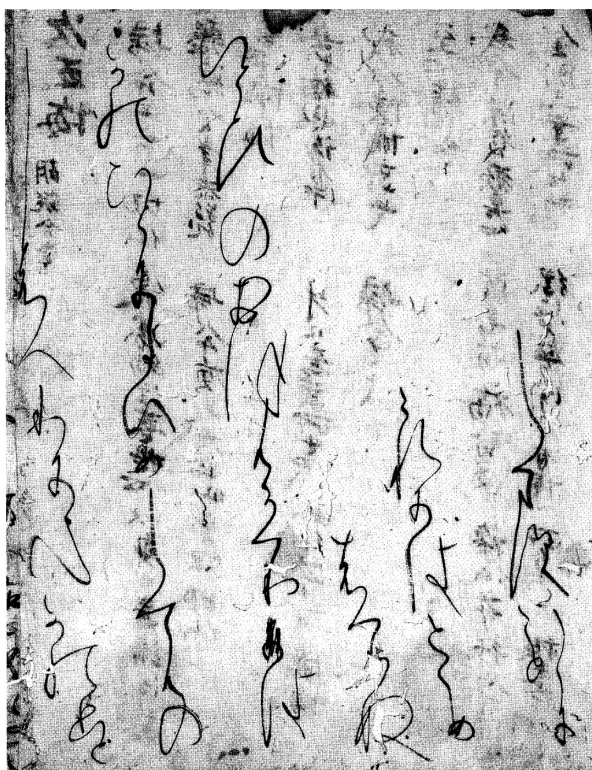
Q 浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。(二八二段)

このように、十七例もの多くの記述がみられる。この中でも、E「たどたどしき真名書きたらむいと見苦し」やF「いみじう真名も仮名もあしう書くを、人笑ひなどする、かくしてなむある」とは、裏を返せば、「真名(漢字)は上手に書くべきである。」「真名(漢字)も仮名(ひらがな)も人に笑われないように、隠さなくてもいいようにすべきだ」ということである。それは、G「書きたる真名のやう、文字の、世に知らずあやしきを見つけて」のように、書いてある漢字の書風や字体が世にも無類に変だと非常に目立って、良くないからなのである。そして、J「誰もいと鳥のあとにしも」のように、ぼつぼつとした筆脈の通らない下手な文字ではなく、真名(漢字)も仮名(ひらがな)も上手に書くべきだとしている。それは、J・K・Mのように、心を入れて上手に書こうと気負って書く姿勢が、この本文からは非常に見られるのである。大切な人や初めての所へ書く手紙などを丁寧に掲っていた清少納言の心掛けでもあり、また、自分を良く見せたいという見栄っ張りな部分でもあるのかもしれない。

さらに、I「法師のいみじげなる手にて、」とは、僧侶の筆跡は、くせのある独特の文字であることを表わしている。また、この時代に書かれていた文字は、L「草仮名書きたる草子」やO「そうにて」のような漢字をくずした草仮名も多く、書き方は、P「くだりせばに、裏表書き乱りたるを」のように、消息文でもあるためか行間が均等ではなく、行末で狭くなつて乱れて書かれたものもあつたのである。このことは、図2の虚空菩薩念誦次第紙背仮名消息にも見られるように、行が右に傾き行末が狭くなつているのである。それは、消息という私

的なものゆえに「裏表書き乱りたる」状態で、紙背において走り書きされていることから明らかである。

図2 虚空菩薩念誦次第紙背仮名消息<sup>1)</sup>



## 五 枕草子にみられる書道観と時代性

『枕草子』の筆者清少納言は、書について関心もあり、さらに自らの筆跡にもこだわりがあつたのではないだろうか。それは、

人のもとにこれよりやるも、人の返事も、書きてやりつる後、文



字一つ二つ思ひなほしたる。(九一段)

からもわかるように、「書いてしまったあとで、文字の一つ二つ考え直したの」が、気にかかると述べており、ここに、書くこと、文章、和歌、文字についてのこだわりを感じるのである。これについて、前出の今井氏も「人への手紙、人への返事、どちらでも、持たせてやつてから、一つ二つなおしたい言葉に気づいたのは、くやしいものだ、<sup>(6)</sup>と言つて、物書きの神経の細かさを示している。」としている。

しかしながら、『紫式部日記』に次のような清少納言批評の記述がある。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。(『新編日本古典文学全集』<sup>(7)</sup>に拠る。)

このように、紫式部は、清少納言のことを「得意顔をして偉そうにしていた人」「あれほど利口ぶって漢字を書き散らしております程度も、よく見ればまだひどく足りない点がたくさんあります。」などと、辛辣に批評しているのである。同じように、岸上慎二氏も、

「よく見れば、不十分なところが多い」といつて、恐らく自分に對比してであろう言い方をしている。清少納言の教養は、中に蓄

積されたものは、どのような場所においても、ほとばしり出るという形式で噴出してくるのであって、これに対して、式部の方は、整然と蓄積されたものが、控え目に、控え目に、人に目立たぬ状態に出されている。こういう、培われた才能が、発揮されるにあつたての利用状態をいうものも、それぞれの性格を反映していると思われる。<sup>(8)</sup>

としている。これは、紫式部に言わせると、「人より特別に優れよう」と思い、またそうふるまいたがる人」である清少納言との性格の違いでもある。さらに、藤本一恵氏の言うように、「漢詩漢文に対する教養は、体系ある専門的な学習によつて身につけたのでなく、元輔や則光といった近親からか、又後宮出入りの貴公子や、帝、中宮などの日常生活の機会に、断片的に得られた。」<sup>(9)</sup>と真名について述べている。清少納言は、紫式部によると、ひどくたりない点があるけれども、利口ぶって漢字を書いていたのである。そんな清少納言ではあるのだが、自分なりの書に対するこだわりもあり、それが道具の見方となり、以下のような記述になったのである。

ア白く清げなるみちのくに紙に、いといと細う書くべくはあらぬ筆して、文書きたる。(二九段)

イ大きにてよきもの  
硯の墨。(二二七段)

ウ薄様、色紙は白き。紫。赤き。刈安染。青きもよし。(一本の一二段)

エ硯の箱は重ねの時絵に雲鳥の紋。(一本の二三段)

才筆は冬毛。使ふもみめもよし。兎の毛。(一本の三四段)

カ墨はまろなる。(一本の一五段)

このように、文房四宝である筆墨硯紙について述べている。この時代の日用調度品であつたのだろうが、それは貴族社会においてであり、ウ「薄様」やウ「刈安染」の紙、エ「硯の箱は二段重ねの箱で時絵に雲や鳥の紋がある。」硯などは、高価でぜいたくなものであつただろう。またこれらの道具は、オ「筆は冬毛の筆。使う時もまた見た目も感じがよい。」にもあるように、使うためのものではあるが、見た目の感じがよいことも重要だったのである。宮廷生活で、なおかつ累代の書跡を扱う文殿の長官である藤原行成とも親しかつた清少納言であるから、書道具においても硯など豪華なものを目にすることも多かったであろうし、さまざまな紙や、墨、筆も用いたであろう。書を日々手習いとして練習し、また人前で和歌を詠んで書きしたためる際にも見た目にも美しい道具のほうが良かったのである。

さらに清少納言は、『枕草子』の中で次のように記述している。

一つには御手を習ひたまへ。次には琴の御琴を、人よりことに弾

きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみなうかべさせたまふを御学問にはせさせたまへ(二一段)

このように、手習い(習字)が女性の教養の第一に置かれ、音楽(琴)、和歌と続くのである。そして、才女といわれたその清少納言ですら

a 手よく書き、歌よく読みて、もののをりごとにもまづ取り出でらるる、うらやまし。(二五二段)

と、文字も歌も上手で、真つ先に名が挙がる人はうらやましいと言っているのである。また、すばらしい女性の例として、

b かたちいとよく、心もをかしき人の、手もようかき、歌もあはれに

よみて、(二五〇段)

を掲げている。容姿、性格に加えて、書、和歌があげられている。このように、『枕草子』の中で何度も女性の教養として、書、和歌が取り上げられていることは、この時代の女性の教養として、書がもっとも大切だったことを表わし、同時に作者清少納言が非常に書に関心があつたからなのである。これについて今井卓爾氏は、

a は、「女を入内させようとする上流階層」で、b は、「恋を語らう中流階層」の例であつて、ともに書道と和歌とが求められている。裏返して見るならば、しかるべき女性の常識的教養でもあつたのが、この二科目であり、さらに、時に音楽が求められていたわけである。<sup>10)</sup>

としている。この時代の上流、中流ともに女性には、書と和歌が常識的教養だったのである。男手の真名(漢字)も漢籍から学び、女手の

仮名（ひらがな）も私的な文字として使い分けていたのである。その書を清少納言は、もつとも近く感じていた。真名から草仮名、仮名へと移り変わる時代の中で、おそらくそれらを自由に書き分け、随筆までも書き著していた清少納言だからこそ紙をはじめ書道具、書風についても一家言があり、こだわりがあるのである。このこだわりこそが、『枕草子』の書道観とみるべきなのである。

## 六 おわりに

『枕草子』の成立年代は、長徳二年（九九六）から長保二年（一〇〇〇）頃といわれている。これは、清少納言の宮仕え後の後輩である紫式部が、『源氏物語』や『紫式部日記』を書いた頃よりもやや前である。そのため前述のような紫式部による清少納言批評が書かれたのである。紫式部から見れば、何かと清少納言のうわさを耳にし、随筆も目にして見ると、まだまだ足りないところが多かったかもしれないが、清少納言は、清少納言なりに書に対してのこだわりが大いにあったはずである。この『枕草子』が日記でも物語でもなく随筆というところが、すでに物事に対して造詣が深かったことを表わしている。その清少納言が、紙（料紙）、消息、添え物、書風について実に多くを語り、書を重要視していたのは明らかである。

その記述は、実にのべ六十例にもおよぶのである。しかも、そのうち紙についてもつとも多く、半数近くの二十八例にもおよぶ。それは、実際の消耗頻度にも匹敵するが、墨、筆、硯は、自らが使用するだけのもので、他人の道具を目にすることはめったにない。しかし紙は、

この時代においては書くことが日常であり、唯一の通信手段でもあった。その書風は、同じ人からの消息ならばほぼ同じだが、紙は、その時によって違うものである。相手に合わせ、季節、気候、衣の色にまで考慮した紙選びが行われていたのである。このような「書」は、手習いを踏まえた上での女性としてのたおやかさの表れであろう。

それは、この時代に求められた教養であり、女性の美の象徴だったのである。しかしながら清少納言は、紫式部が言うように、利口ぶって自らが書の達人と思い、自信があつたわけではなく、むしろ書においては、コンプレックスがあつたのではないだろうか。まだまだ不十分な自分の書の能力を少しでも上げたいがゆえに、周りの書に関することが気になるのである。他人の消息文の紙や書きぶり、添え物までも「艶なる」「きよげ」「めでたし」「くちをし」「をかし」といちいち評価もしているのである。特に、「紅梅の薄様に書かせたまふが、御衣の同じ色にほひかよひたる、なほかくしもおしはかりまゐらす人はあらむとぞくちをしき。」などは、「御衣と同じ色にまでしているとは、なんて心にくいことでしょう。してやられたわ。」とでも言いあげである。それが、紙について二十八例も述べられているゆえにある。墨や筆、硯ではなく、人が見てまず目にするのが紙である。紙は、文字よりも先に消息を開く前に目に入るのである。まずは見た目で、文字という中身よりも第一印象が大切だと清少納言は思ったのである。相手にどう見られるか、それを常に思い、大切な人には柔らかに感じる薄様で紫や赤、青色を使い、香を焚きしめ、花の枝を添えたのである。消息の内容だけでなく、文字、紙、香、添え物も含め

た全体が一つの消息だという、いわばコーデイナーの美が清少納言の感性なのである。それは、書に、文字にコンプレックスがあったからこそ紙や見た目でカバーしようとしたのである。

また、紫式部も『源氏物語』の中で、書について述べているが、その多くが文字についての書きぶりである。紫式部には、書とはやはり実用的な文字であった。それは、前述した『紫式部日記』の「真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたぬこと多かり。」からもわかるように、紫式部にとっては、「真名」の書きぶりが重要なのであった。清少納言が書いた『枕草子』のかなも目にしたのであるに、「真名」についてのみ書かれている。そこが、感性の清少納言と実用的な紫式部との違いであろう。

これらのことから、『枕草子』にみられる清少納言の書道観は、この時代に求められていたものでもあり、また清少納言自身が自分の書に強いこだわりを持って、さらに上をめざしていたといえるのではないだろうか。

この時代に最も大切であった書は、ただ手習いとして練習するだけでなく、その道具や書かれた状態、添え物までもを含めた一つの美意識、貴族社会における文化として捉えられていたのである。

# [注]

- (1) 松尾聰・永井和子校注・訳『新編日本古典文学全集18枕草子』(小学館 一九九七)
- (2) 小松茂美監修『日本名跡叢刊 平安 假名消息』(二玄社 一九八六)

- (3) 前掲 小松茂美監修『日本名跡叢刊 平安 假名消息』に拠る。
- (4) 今井卓爾『枕草子研究』(早稲田大学出版部 H元)
- (5) 藤本宗利『枕草子研究』(風間書房 二〇〇二)
- (6) 前掲 今井卓爾『枕草子研究』に拠る。
- (7) 藤本忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集26和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館 一九九四
- (8) 岸上慎二『清少納言』(吉川弘文館 S六二)
- (9) 藤本一恵『平安中期文学の研究』(桜風社 S六一)
- (10) 前掲 今井卓爾『枕草子研究』に拠る。
- (11) 前掲 小松茂美監修『日本名跡叢刊 平安 假名消息』に拠る。
- (12) 前掲 小松茂美監修『日本名跡叢刊 平安 假名消息』に拠る。
- (13) 前掲 小松茂美監修『日本名跡叢刊 平安 假名消息』に拠る。

(なんじよう かよ 文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導…長尾 秀則 教授)

二〇一一年九月三十日受理

「付記」

図3 北山抄紙背仮名消息<sup>12)</sup>

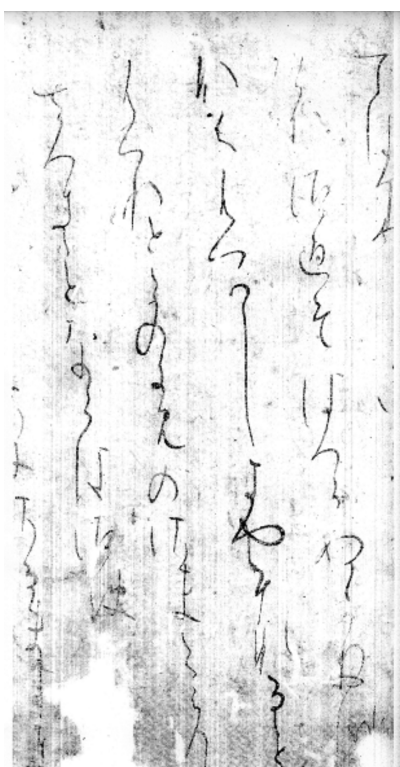


図4 延喜式紙背仮名消息<sup>13)</sup>

